

# 国際教育交流事業で生徒は何を学ぶのか

～派遣前後における生徒意識の変容について～

千葉県立佐倉南高等学校 教諭 濱田 竜亘

## 1 はじめに

本校はユネスコスクールに加盟している。ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するために、平和教育や人権教育、国際理解教育などを実践している学校である。本校の取組みとしては、人権についての講演会を毎年実施したり、地域のボランティア活動に参加したり、日本語学校の学生と交流をしたりしている。

本校の学生は、素直で真面目な生徒も多いが、その一方で小学校や中学校の義務教育の段階で、クラスのリーダーとして活躍した生徒が少なく、また、成功体験が決して多くない生徒が少なくない。それ故に、自分に自信がもてないなど、自己肯定感の低い生徒が目立つ。今回、千葉県国際教育交流事業（マレーシア派遣。以下、マレーシア派遣と記述）に本校から生徒4名を派遣した。この4名は、本校の生徒の中では比較的リーダーとして活躍できる素質をもっているが、やはり自ら率先して行動するという姿勢に欠ける部分が見られた。この生徒達が、7日間のマレーシアへの派遣や事前研修を通して、何を学び、何を感じて、どのような成長が見られたのかを以下に述べたい。

## 2 事前研修前の生徒達の意識

マレーシアへ派遣する生徒達に対して、「マレーシア派遣で何を学びたいのか」という問いを7月中旬に投げかけた。生徒達は、以下のような回答を示した。

- ・「食文化、料理」
- ・「マレーシアの音楽」
- ・「生活の様子」
- ・「伝統」
- ・「熱帯雨林に住んでいる生物」
- ・「環境」
- ・「英語の実力」
- ・「英語で話したい」
- ・「文化」

生徒が出した以上のような回答を眺めてみると、漠然とした回答や単語での回答が目立ち、具体性がない。これは、マレーシアや東南アジアに対する気候や文化などの事前知識が乏しいためと考えられる。

## 3 事前研修（1日研修・宿泊研修）後の生徒達の意識

1日研修では、渡航準備の説明、グローバル社会やマレーシアやムスリムについての理解を深めるプログラムを受講した。宿泊研修では、ホームステイ時の心構えや英語プレゼンテーション研修を受講し、また、現地学校でのパフォーマンスの練習を行うなど、充実した内容であった。特に、英語プレゼンテーション研修では、マレーシアからの留学生から多大なアドバイスをもらい、また

専門の講師によるプレゼンテーション研修は、生徒達にとって大きな刺激になったようである。

これらの研修が終了した後に、生徒達に「マレーシア派遣で何を学びたいのか、またどのような経験ができると考えているのか」という問いを投げかけた。前回と質問内容を多少変えたのは、この問いかけの方が、生徒がより幅広く考え、答えやすくなるだろうと考えたためである。これに対して生徒達は、以下のような回答を示した。



<事前研修の様子>

- ・「現地学校との交流で、マレーシアの友達を作りたい。なかなかない経験のため。」
- ・「英語力」
- ・「他国の人のお考え方を知り、自分の視野を広げることができる。」
- ・「日本では感じることでできない自然を感じられる。」
- ・「カンポンステイでマレーシアの生活を体験できる。」
- ・「クアラルンプール市内を見学して、マレーシアがどんなところか知りたい。」
- ・「環境、雰囲気」
- ・「マレーシアにいる生き物を目視したい。」
- ・「日本にはない文化や伝統」
- ・「日本で教わっている英文法ではなく、現地の英会話が経験できる。」

以上のような生徒達の回答を眺めてみると、まだ少し単語での表現もあるが、以前の回答よりも具体的に文章で記述されているものが多くなった。事前研修を受講したことにより、マレーシアへの理解も深まり、マレーシアで具体的に何をするのか、また英語プレゼンテーションをどのように行えば良いのかが明確になったためと考えられる。

生徒達のマレーシア派遣に対する意識や心構えが、この半月の間にここまで変化するとは正直考えてもみなかった。せっかくのマレーシア派遣もただ漠然と行ってしまっただけでは意味がない。やはり、事前にマレーシアの様々な側面について学習し、現地に行って何を学び、経験したいかを明確にしてこそ、現地での体験や学習が生徒達の血肉になるのだと思う。

#### 4 マレーシア派遣中における生徒達の気づき

マレーシア派遣は、充実したプログラムが組まれた7日間であったが、ここでは、そのうちいくつかをピックアップし、そこで生徒達が何を学び、感じたのかを生徒達のコメントを中心にみていくことにしたい。

### (1) Selangor State Education Department (セランゴール州教育機関)

Selangor State Education Department では、素晴らしい設備の整った会議室で、州の教育施策などのお話をうかがった。相手はお役人なので、堅い人物像を思い描いていたが、マレーシアの人々に共通した人柄なのか、とてもフレンドリーに接していただいた。生徒達の中にも、そのことについてコメントしている者もいた。以下に生徒達の主な感想を示す。

- ①「男女の差別無く、女性が教育の仕事で活躍していると聞いて嬉しくなった。」
- ②「教育機関の人々が、明るくノリの良い人で驚いた。」
- ③「お土産にもらった食べ物はとても美味しかったのですが、飲み物は不思議な味で、キャラメルポップコーンの味で驚いた。」
- ④「マレーシアの教員は、日本と違い、女性が80%以上、男性が20%未満であることを知った。」

①や④は、教育の仕事における生徒達のイメージを覆したようにうかがえるコメントである。日本では、小学校でこそ女性教員が多いが、中学校、高等学校と上がっていくにつれて、男性教員が多くなるイメージがあったのではないだろうか。②に関しては、教育機関といういわゆるお役所の堅いイメージがあるなかで、現地の人々は明るく、記念写真をたくさん撮影してくれるなど、日本とは全く異なるイメージだったのではないだろうか。③は食文化に関するコメントである。生徒が異なれば、同じ体験をしても異なる学びがあるのは当然であるが、①～④のコメントを見ると、すべて日本との比較のもとにマレーシアを捉えているように思う。



(セランゴール州教育機関)

### (2) SMK SEAFIELD 校での交流

SMK SEAFIELD 校での交流では、本校の生徒達は、日本の部活動についてプレゼンテーションを行った。弓道部と茶道部に所属する生徒が2名ずつだったので、弓道と茶道を紹介した。

プレゼンテーションの内容について、生徒達は内容やどのような道具を用いるかなど、事前に充分考え、また英文原稿に関しても、本校の英語教員の助けを

借りながらも自分たちで準備をしてきた。だが、実際にプレゼンテーションを行う段階で、臆してしまうのではないかと正直不安であった。しかし、それも杞憂であった。英語が不慣れながらも生徒達は一生懸命、現地の学生と交流をしようとし、また事前研修で学んだことを生かしてしっかりとプレゼンテーションを行うことができた。

近年日本食が注目を浴びている影響か、実際に点てた抹茶や金平糖を振る舞ったことは、特に好評であった。

この SMK SEAFIELD 校での交流で、本校生徒達は何を学び、感じたのかを以下に示す。

- ①「現地高校との交流では初めての1対1での会話で少しとまどったが、基本の5文型を使えば、ある程度会話できることがわかった。」
- ②「プレゼンが成功して良かった。簡単な単語だったが言葉が通じたときは嬉しかった。」
- ③「現地の高校の人と仲良くできて良かった。」
- ④「現地の高校生と一緒にお話をしたり、お土産を交換したりして、とても嬉しかったけど、自分の英語の実力が全然ダメだと実感しました。本当はもっと聞きたいことがあったけど、英語がわからなくて話せなかったり、相手が言っていることを所々理解することができなくて悔しかったです。もっと英語の勉強をして話せるようになりたいと思いました。」

①や②は、きちんとした文章で話さなくても、基本的な単語や文章で相手に伝わることを実感したようである。③は、異国人とのコミュニケーションを楽しんだ姿勢がうかがえる。④は、聞きたいことがあるのに聞けなかった悔しさが滲み出ている。いずれにしても、生徒達が今後ももっと英語を学習したいという欲求を掻き立てるのに、学校交流は成功したと言えるのではないだろうか。

また、プレゼンテーションの内容への現地学生の反応に対するコメントはなく、すべて生徒自身の英語でのコミュニケーションに関するコメントである。このことは、事前に生徒達がマレーシア研修で何を学びたいかで回答したコメント（「英語力」）が反映されていると考えられる。



<プレゼンの様子>

### (3) カンポンステイ

カンポンステイでは、生徒達は他校の生徒とグループになって、各家庭で1泊のホームステイをした。クアラルンプールに対する生徒達の感想は、「思った

よりも都会だった。」「日本とあまり変わらないと思った。」というようなコメントがみられたが、さすがに農村でのホームステイとなると、勝手が違ったようである。しかし、そこにはホストファミリーとの交流を楽しむ姿も垣間見える。

- ① 「とても温かい家庭で安心した。」
- ② 「子供達の名前を漢字、ひらがなで書いてプレゼントしたら喜んでくれた。」
- ③ 「シャワーがなくて少し不便だった。」
- ④ 「家に着いてすぐに、ティータイムで油っこいものを食べた。」
- ⑤ 「朝食を食べたのに、その1時間後に、おやつにカレーライスが出てきた。」

①は、初めてのホームステイで不安があったであろう心境がうかがえる。②は、積極的にホストファミリーと交流をする楽しさや嬉しさを感じ取ることができる。③～⑤は、日本の衣食住との違いを実感できたのではないだろうか。特にマレーシアの人は、よく食べると事前研修で聞かされていた生徒達であったが、それを実際に体験することで、より理解が深まったのではないだろうか。私自身も、カンポンステイを体験したが、ホームステイ先に着くなり、ティータイムで大皿に山盛りのドーナツのようなお菓子をごちそうになり、その2時間後には、温かく心のこもった食事をたらふくごちそうになった。

## 5 マレーシア派遣経験後の生徒達の意識

マレーシア派遣の終了後に、生徒達にはいくつか質問を投げかけた。その回答をみていくことで、生徒達はこの派遣で何を学び、またどのように意識が変容したのかを考察したい。

(1) 実際にマレーシアに行ってみて、行く前とイメージが変わったことは何ですか。

- ① 「建築している所や工事中の所が多かった。」
- ② 「高いビルがたくさん建っていて、すごい都会だった。常に車がいっぱいだったこと。」
- ③ 「思っていたよりもクアラルンプールが栄えていた。」
- ④ 「物価が日本に比べて安いと、貧富の差が少ないと思っていたが、思った以上に差があった。」

生徒達は、マレーシアは経済発展が著しいとは事前知識で知っていたものの、ここまで発展しているとは思わなかったようである。特にクアラルンプール市内の高層ビル群には驚いていた。私自身も、正直ここまでクアラルンプールが発展しているとは思ってもみず、場所によっては東京以上に先端技術が駆使され発展していると感じた場所もあった。④に関しては、クアラルンプールが発展している一方で、一步市外に出ると昔のままの風景が広がり、その格差を実感したからだと考えられる。



<ペトロナスツインタワー>



<カンポンスウェイのホームステイ先>

(2) マレーシア派遣を通して、自分の中で一番勉強になったこと、成長を感じた部分は何ですか。

- ①「英語で会話するとき、五文型を理解していれば通じることが勉強になった。」
- ②「自分の英語がまだまだだったこと。」
- ③「カンポンスウェイで日本と違う家族の雰囲気を感じた。」
- ④「多民族国家で色々な考えがあるので自分の考え、視野を広げることができた。」

このマレーシア派遣を通して、一番勉強になったこと、成長を感じた部分は、生徒一人一人で異なるものだが、①と②は英語に関することである。派遣前の生徒の意識調査でも、マレーシア派遣では「英語を学びたい」という生徒が多く、マレーシア派遣の前後でもその意識は変わらなかったようである。他に書いてもらったコメントを見ると、むしろ、もっと英語でコミュニケーションをとりたいという意識が高まったように感じられる。

③と④も現地に行ったからこそそのコメントである。日本でマレーシアについていくら学習しても、現地で実際に見聞することにはかなわないと感じた。やはり事前研修で予めしっかりとマレーシアについて学習したからこそ、生徒達はどのような意識で現地を見学したり、体験したりすれば良いかがわかり、それがこのような生徒達の感想につながっていると考えられる。

## 6 おわりに

7日間のマレーシア派遣で、生徒達は日本にいただけでは決して得ることができない経験を得ることができた。以下に、ある生徒が記したマレーシア派遣全体を通して得た感想を紹介したい。

「マレーシアの人は、とてもフレンドリーで日本語をしゃべれる人もいてとても楽しかったです。この派遣を通じて違う学校の高校生達と仲良くなれて、ご飯を一緒に食べることができてとても嬉しかったです。学ぶことや今後の目標をたくさん見つけて、この派遣に参加できて本当に良かったです。」

マレーシア派遣が決まった段階では、「この派遣で学びたいこと」について、単語で2つか3つしか書けなかった生徒が、派遣後には上記のような感想を記している。マレーシアの人との英語での交流ももちろんだが、他校の生徒との交流も良い刺激になったようである。また、生徒達の今後の人生のなかで、このマレーシア派遣が大きな糧あるいは転機となるようにも感じる。

以上、生徒達の派遣前後の意識の変容を、彼らが書いたコメントを中心にみてきた。この中で浮かび上がってきたことは、マレーシア派遣は、生徒達の今後の人生にとって確実に大きなプラスになるであろうということである。派遣生徒の人数に制限があるとはいえ、実りの多い国際教育交流事業を今後も是非とも継続していただきたいと思う。